

論文

ジョージ・ミュラーの青年時代の迷走と回心

——孤児院創設に至る軌跡（1805-1835）——

木原活信[†]

要約：これまでの筆者のジョージ・ミュラー研究では、ドイツ敬虔主義との関連、英国初期ブラザレン運動との関係、山室軍平、石井十次ら日本への影響について明らかにしてきたが、その思想と事業の全体像や孤児院創設の動機を解明するためには、ミュラー自身の主観的な内的世界の理解が必要であり、生い立ちの分析が不可欠である。そこで本論では、ミュラーの誕生から孤児院創設に至る軌跡（1805-1835）を日誌、書簡、機関誌、自叙伝をもとに分析した。分析対象期間は、孤児院創設に至るまでの青年時代に限定して、彼の迷走、回心、訓練、孤児院着想に焦点をあてた。時期区分については、ミュラーの内的世界に迫るために、自叙伝の区分を踏襲した。これらを通して、これまで断片的であった孤児院創設に至る着想とその動機を時系列的に再配置したうえで再検討した。それによってミュラーの思想形成過程とその内的世界観が繋がり、彼の事業と思想の全体像が鮮明になった。

キーワード：ジョージ・ミュラー、ジョージ・ミュラーの自叙伝、ブリストル孤児院、聖書知識普及協会（SKI）

目次

1. 誕生、迷走、逮捕 1805-1825
 - 1-1. 誕生と家族
 - 1-2. 形だけの堅信礼
 - 1-3. 不良少年の逮捕、投獄
 - 1-4. 神学のための準備教育
2. 回心と新生 1825-1826
 - 2-1. 突然の回心
 - 2-2. 父親から勘当
 - 2-3. 決別した物事
 - 2-4. アドリブ説教
3. ティンマスでの療養と出会い 1826-1829
 - 3-1. 海外宣教の夢
 - 3-2. ロンドン宣教協会での訓練
 - 3-3. ティンマスでの転地療養
4. 「イエスに頼る」訓練 1830-1832

[†]同志社大学社会学部教授

*2021年3月11日受付，2021年3月11日掲載決定

- 4-1. ティンマスでの働き開始
 - 4-2. ミュラーの再洗礼
 - 4-3. 一定の給与を得ることの放棄
 - 4-4. メアリー・グローブスとの結婚
 - 4-5. 極貧の托鉢的生活
 - 5. ブリストルでの宣教開始 1832-1835
 - 5-1. ブリストルへ
 - 5-2. クレイクとの共同牧会
 - 5-3. ベテスダ集会での開拓伝道
 - 5-4. 娘の誕生, コレラ, フランケ自伝
 - 5-5. 路上の貧しい子どもたちへの働き
 - 6. 「聖書知識普及協会」(SKI) 設立 1834-1835
 - 6-1. 「聖書知識普及協会」
 - 6-2. 貧しい児童への祈り
 - 6-3. ドイツへの一時帰国
- 結び

はじめに

ブリストルでアシュリー・ダウンの孤児院を創設したジョージ・ミュラー (George Müller, 1805-1898) に関して、従来の偉人伝の枠を超えて、「ジョージ・ミュラー研究」として議論をすすめてきた。これまで既に山室軍平への影響 (木原 1993)、石井十次への影響 (木原 1999)、ドイツ敬虔主義との関連 (木原 2018)、英国初期ブラザレン運動との関係 (木原 2019)、日本への影響 (木原 2020) について明らかにしてきた。これらの研究によりその思想系譜や事業展開はある程度解明できたが、その思想と事業の全体像や孤児院創設の動機を解明するためには、ミュラー自身の主観的な内的世界の理解が必要であり、そのためには孤児事業に着手するまでの生い立ちの分析が不可欠である。

そこで本論では、ミュラーの誕生から孤児院創設に至る軌跡 (1805-1835) を日誌、書簡、機関誌 (Müller 1837 N)⁽¹⁾、自叙伝 (Müller 1860)⁽²⁾ をもとに分析した。その際、ピアソンの伝記 (Pierson 1899)⁽³⁾ も相対化しつつ参照する。なお、分析対象時期は、孤児院創設に至るまでの青年時代 (1805-1835) に限定して、その迷走、回心、訓練、そして孤児院着想に焦点をあてる。その際の時期区分については、やや分量等でバランスが悪いところがあるが、ミュラーの内的世界に迫るために、彼の自叙伝の区分を踏襲して、出来事を再配置して記載していくこととする。

1. 誕生、迷走、逮捕 1805-1825

ミュラーの出生と家族史を遡ると、著名の社会事業家たちの多くの場合にあるよう

な、貧しい家庭に生まれたとか、何らかの障害を克服したとか、乳幼児期に両親を亡くしたとか、コンプレックスを克服したというような特別なエピソードがあるわけではない。ミュラーの場合、思春期に母親を亡くすということはあっても、当時で言えば総じて裕福な家庭に育ち、高等教育を受けている。その一方で、父親から「甘やかされて育った」子供時代を過ごしているようである。そして自らの欲望にしたがって自由奔放に放蕩した挙句に罪を犯し、逮捕され投獄されるまでに至る異例の少年時代をもつ経歴の生い立ちでもある。以下ではミュラーの誕生から青年期の生い立ちについて述べていく。

1-1. 誕生と家族

ジョージ・ミュラー (George Müller) は、プロシア (現ドイツ) のクロッペンシュタット (Kroppenstaedt) に、父ヨハン・フリードリッヒ・ミュラー (Johann Friedrich Müller) と母ゾフィ・エレアノ・ハゼ (Sophie Eleanor Haase) の次男として1805年の9月27日に誕生した。ただし、ミュラーのドイツでの戸籍上の正式名称はヨハン・ゲオルク・フェルディナント・ミュラー (Johann Georg Ferdinand Müller) である。兄はフリードリッヒ・ヨハン・ヴィルヘルム・ミュラー (Friedrich Johann Wilhelm Müller, 1803-1838) である。家族に関する詳しい情報は、ミュラー自身あまり公開していない。実際、両親の名前、兄の名前すら機関誌、日誌等には記録がないため、氏名等は、埋葬記録データサイト (“Find A Grave”) に基づいている。

父親は国税局に努める役人で、ミュラーが5歳になった1810年に仕事の関係で、そこから60キロほど離れたハイメルスレーベン (Heimersleben) へ引っ越した。少年時代は、国家公務員の父の職業の転勤の関係でプロシア内での引っ越しが多く、プロシアの一つの街に故郷としてアイデンティティをもつということはなかったようである (Müller 1837 N: 15-16)。ただし、学生時代に住むことになったハレ (Halle) は、回心を経験する信仰の原点となり、ミュラーにとって特別の場所になった (木原 2018)。

1819年、ミュラー14歳の時に母親を亡くしているが、母親の主観的な面影、思い出については自叙伝、日記、手紙その他においてもほとんど記録がない。父はその後再婚しているが、そのことについては事実関係すら言及がない。異母兄弟であるフランツ (Franz “Frank” Müller) がいたことも先述の埋葬記録データ (“Find A Grave”) には残っている。その後の回想などでも家族背景についてはあまり語られていない。14歳の多感な時期に母親を喪失したということはその後の人格形成にも影響がありそうであるが、不思議なほどにミュラーは母親についてのコメントを避けている。当時の日誌や自叙伝も事実関係を淡々と述べるのみで死別に伴う悲嘆やそれにかかわる感情について表明していない。

残されている記録によると、14歳の時、ミュラーは「不良少年時代」真っ盛りであり、友達とカードゲームに興じ酔いつぶれてしまい、母親の訃報をその翌日に知ってしまう（Müller 1860:21）。母の死については、ミュラー自身は自らの放蕩生活を示す罪の告白のような象徴的な形で記録している（Müller 1860:21）。しかし、ミュラーの母親が実際どんな人物であったのか、また母親とミュラーの関係がどのようなものであったかはミュラー自身からは回想もなく、結局、彼の母親像はわからない。父親のことについては自叙伝のなかである程度の記載はあるが、それらからすると、それほど親しい関係ではなかったようである。少なくとも理想の父子関係などとはかけ離れており、またミュラーが父親を尊敬の対象としているというような記述は一切ない。

1-2. 形だけの堅信礼

ミュラーの父親は、先述した通り、職業が税務署の役人であったが、彼の回想によると、家庭では、子供たちにお小遣い（金）を余分に与え過ぎるなど、甘やかして育てていたようである。ミュラーの伝記を日本で最初に記した金井為一郎（1926）は、「父の溺愛」（金井 1926=1990:6）があり、偏愛のような形で兄弟との関係にも影響を与えたことを指摘している⁽⁴⁾。

自叙伝のなかで明示しているのは、父親は息子をルター派（国教会）の聖職者にならせるべく、ルター派の大聖堂付属のハルバーシュタット古典教育学校（Halberstadt Cathedral Classical School）に入れるなど、そのための教育には熱心であったようである（Müller 1837 N:16）。これらは後のミュラーの述懐では、キリスト者の何たるか、信仰の何たるかではなく、あくまで当時の安定した地位と尊敬される聖職者という職業を得て欲しいという親のエゴがあったとされる（Müller 1837 N:15-16）。ただし、これはミュラー家だけの特殊事情ではなく、むしろ当時のドイツのエリート家庭のごく普通の発想であった。そこには宗教改革の拠点であったドイツといえども、当時の世相は信仰の熱意はもはや消え失せて世俗化した国教会の姿と聖職者像を伝えるものであろう。

1820年に15歳になり、堅信礼を受けて正式にルター派の陪餐会員になった（Müller 1860:21）。しかし聖餐に与えるようになって、彼の述懐によるとあくまでそれは「形式上」であり、そこには何の感動も喜びもなく、「神への祈り、真実な悔い改め、信仰、救いの計画への知識は皆無であった」（without prayer, without true repentance, without faith, without knowledge of the plan of salvation, I was confirmed, and took the Lord's Supper）（Müller 1860:21）と述べる通り、信仰の覚醒も、高揚感も生き方への変化もないあくまで年齢に達したことによる形式的なものに過ぎなかった（Müller 1837 N:15-16）。

1-3. 不良少年の逮捕、投獄

それどころか、ミュラーの少年時代の悪行はエスカレートしていくことになる。彼の自叙伝には、他人のパンを盗んで食べてしまったようなちょっとした悪戯的なことにはじまり、10代前半で盗み、飲酒が更に常習化し、そしてついには逮捕、投獄にいたる(Müller 1860:21)。これらは少年期の悪戯というよりも、金を計画的に盗むなど金銭にまつわる不法行為が大半であった。家のタンス貯金をこっそり盗む、親をだまして不法の金を得る、そして親族になりすまして金を借りるなどとエスカレートし、それが日常化していった。これらの悪行の数々をミュラー自身は、「罪」の記録を負の遺産として赤裸々に記載している(Müller 1837 N:17-20)。これは青年期の「理由なき反抗」というよりは、むしろ一種の知能犯的であり、金銭にまつわる詐欺的行為につながるような悪質なものであった。ミュラーは、それらをすべてキリスト教の言う「罪」の性質として描き、自分中心に生きる人間の神への原罪の結果として、位置づけている。

ピアソンが「ふしだらな悪の道」(Pierson 1899:21=1964:15)の一つとして描いているのは、1821年11月に恋をしたカトリックの少女を追いかけてのマクデブルクへの旅(a pleasure excursion to Magdeburg)に行くなどの16歳の時のエピソードである(Pierson 1899:21)。ただしその経緯に関しては史料的に裏付ける情報が乏しく、今の時代では好奇心に富む青年時代の「微笑ましい切ない話」のようにも思えないわけではないが、この「思慕した少女」のことは、自叙伝には記載がなく、機関誌には「若い女性」(young female)に会いに行ったと記録している(Müller 1837 N:17-18)。ただし、これが「微笑ましい切ない青春の思い出」だけで終わらないことになる。ミュラーは、この旅行でだまし盗った父親の金を使うだけでなく、親族に成り済ました旅券で、高級ホテルに宿泊するなど豪遊と放蕩三昧に過ごす。しかし、ついにはそれがすべて発覚することとなった。そしてホテル費用の不払いにより逮捕され、起訴され有罪となり、投獄されることになってしまう。「うそ偽りの長い鎖」(Pierson 1899:21=1964:16)の結末を自ら刈り取ることになる。投獄期間は、正確に自叙伝に記載されており、「私は1881年12月18日～1882年1月12日まで投獄されていた」(I was in prison from December 18th 1821, till January 12th, 1822)(Müller 1860:23; Müller 1837 N:19)となっている。法廷での起訴内容、および有罪にいたる詳細は不明であるが、役人であった父親の執り成しと弁償により、また16歳の未成年であったこともあって投獄は一か月足らずで刑期を終え釈放された。こうして16歳で前科者となったが、この逮捕歴についても隠すことなく人生の負の遺産として、機関誌にも、自叙伝にも明記している(Müller 1860:22-23; Müller 1837 N:19)。

このあたりの記述から、研究対象としてみた場合に、ミュラーの正直な人柄と、資料として取り扱う自叙伝や機関誌の信憑性が出てくる。さすがに自叙伝を書く場合に、恥

の観点から、逮捕歴、投獄歴などの前科は消したいところであろうが、それもむしろ赤裸々に記載することによって、自分の罪人の原点の記録と、「赦された罪人」の自覚ゆえにそれを明確にできるのであろう。初期のキリスト教徒を迫害・弾圧したことを生涯にわたって告白し、「罪人の頭」(I テモテ 1 章 15 節)と自称した使徒パウロの書簡の記述を彷彿とさせるものがある。

1-4. 神学のための準備教育

ミュラーは既に国教会の牧師になるため準備期間として 11 歳で入学したハルバーシュタット大聖堂付属の古典教育学校で学んできたが、不良行為の挙句に投獄された不良少年の更生のために父親は、半ば強制的に大学神学部の予科のような位置づけとしてノルトハウゼン校 (the gymnasium of Nordhausen) (*現在で言えば高等学校相当であろう) に親元から離れさせて寄宿舎で学ばせた。ミュラー自身はここで 2 年半の間、厳しく躰られたようであるが、知識を詰め込んだに過ぎないと自覚していた (Müller 1860 : 23)。

ノルトハウゼン校時代のことは自叙伝には多少書かれているが、逮捕歴もある「不良少年」にしては、不思議なことに勉学においては抜群の成績であった。後にはハレ大学の神学生としてヘブライ語、ギリシャ語を習得するが、この学校では特に古典語 (ラテン語) を得意としており、高校生ですでにラテン語で教師と会話が可能であったほどの優秀さで相当に目立っていたと記録されている (Müller 1860 : 23-24)。後にハレ大学在学中はフランス語の小説をドイツ語に翻訳をして出版をするなど語学力は卓越していた。大学卒業後に宣教師としてイギリスに行くことから、母国語のドイツ語のほかに、英語を習得したが、フランス語、ラテン語、ヘブライ語、ギリシャ語など外国語の素養は秀でていたようである (Müller 1837 N : 20-21)。

しかし神学生時代にも回心するまでは、肝心の聖書自体にはまったく興味を示さず、とりわけキケロ (Marcus Tullius Cicero)、ヴォルテール (Voltaire) などの哲学書や文学書に関心を寄せていたようである (Müller 1837 N : 21)。これらの書物や小説を読むことを教養を身に着けるとはとらずに、世の楽しみや罪にふける行為の象徴としてミュラー自身は描いているが、むしろこのような自覚こそが当時のピューリタンの性格を物語るものであろう。

2. 回心と新生 1825-1826

少年時代の不良行為、犯罪、逮捕への償いもこめて形式上は勉学に勤しむようになり、父に勧められて「更生」を込めて入学したノルトハウゼン校を、優秀な成績をおさ

めて卒業することができた。そして親の希望通り、将来のルター派（国教会）の牧師になるべくハレ大学神学部に入学する。ハレ大学は当時のドイツにおいて敬虔主義神学の砦であり、ミュラーの孤児事業の原型ともなったフランケの大学でもある（木原2018）。

2-1. 突然の回心

1825年にハレ大学に入学したミュラーは、ルター派の国教会の牧師となるべく神学生として聖書学、説教など神学の基礎訓練を受けることになる。もともと知的能力は高かったこともあり、知識体系としての神学の基礎はそこである程度身に着け、ルター派の国教会において説教ができる立場（国家資格）になった（Müller 1860: 24）。

しかし、彼の内面の変革の転機となったのはそのような大学や勉学の結果ではなかった。ところで、自叙伝や日誌でしばしば実名を掲げる学友にベータ（Beta）がいた。ベータは、在学中に信仰に熱心になっていて尊敬されていたこともあり、ミュラー自身が自分の悪行を変えるために友情を求めてミュラーのほうから近づいた⁽⁵⁾。幾つかの伝記ではベータと同行するスイス旅行の最中に回心をしたとされるが、実際はスイスの旅行から帰ってきてからと考えるほうが整合性がとれる。

多くの伝記ではミュラーの回心は突然起こったとされている。ただし、彼の個人的な記録、日記を見る限りそれまで彼が虚しさや孤独を感じて迷走し、すでに経験していた宗教的儀式では心の奥底では満足できず、キリスト教の信仰の本質を求めようとする霊的渴望、あるいは求道心が既に芽生えてきていたことがその前提として考えられるようである。このことと「突然の回心」がリンクしていたと考えるのが自然であろう。

回心にいたる直接の契機は以下の通りである。スイス旅行から帰ってすぐ、旅行にも同行した学友ベータの誘いで、彼は1825年の11月中旬のある土曜日の夕刻、ワーグナー兄*の家庭（brother Wagner's house）（*補注：ブラザレンの伝統で、ミュラーの記載では信者を「兄弟」「姉妹」と呼称しており、本論ではミュラーの内的世界の文脈を重視する観点から極力引用等に関しては本人の記載に従い原文のまま記載している）で行われた家庭集会に参加することになった（Müller 1860: 25）。まだこの当時はドイツでブラザレン運動は起こっていなかったもので、おそらくワーグナー家の集会は、フランケ敬虔主義に影響されたものであったのであろう。この点については、木原（2018）に詳しい。そこでミュラーが直接目にしたもの、体験したものが、文字通り彼の人生の一大転機となった。それがどういうものだったのか、ミュラーの述懐に基づいて正確を期すために以下そのまま引用しておく。

跪いて祈ることに衝撃を受けた。なぜなら、彼（家庭集会の参加者*）のように跪いて祈

る姿をこれまで見たことがなく、私自身もそうして跪いて祈ったことなどなかったものだから。それから彼は聖句と印刷された説教を読み上げていた。叙階された聖職者が出席した場合を除いて、プロイセンでは聖書を釈義する集会は許可されなかったからである。集会の終わりにまた賛美歌を歌い、そして最後に家の主人が祈った。彼が祈っている間、私の気持ちは次のようなものだった。「私はこの無学の男性よりもはるかに（神学を*）学んでいるが、私はこのようには祈ることができない。」集会全体が本当に衝撃的だった。それでいて私は幸せを感じた。でも、なぜ幸せなのかと聞かれたらそれにはっきりと説明できなかった。（Müller 1860 : 28 *カッコ内は筆者）

ミュラーが述べる通り、その集いはいたってシンプルであり、決してなにか特別な高揚感のある神秘的なものでもなく、ただ静かな「素朴な集まり」であったに過ぎない。集まった数名が互いに心を込めて祈り、そしてそこで聖書が朗読されたというものであった。神の前に跪いて祈る祈りと聖書朗読、プリントされた説教（聖職者でない者の聖書講解は当時禁じられていたため）だけの素朴な集いが、ミュラーは自分にはないものを感じ取ったというのである。特に人が神の前に跪くという姿勢には衝撃を受けたようである（This kneeling down made a deep impression upon me）（Müller 1860 : 28）。この夜の集いの光景が彼の人生を変えることになる。「私は彼のように跪いて祈る姿をこれまで見たことがなく、私自身もそうして跪いて祈ったことなどなかった」（for I had never either seen any one on his knees, nor had I ever myself prayed on my knees.）（Müller 1860 : 28）ミュラーは「私はこの無学の男性よりもはるかに（神学を）学んでいるが、私はこのようには祈ることができない。」“I could not pray as well, though I am much more learned than this illiterate man.”（Müller 1860 : 28）と述べている。ちなみにここで参加して跪いて祈っていたのはケイシャ兄（brother Kayser）であり、後にアフリカの宣教師となる人物であったと記録されている。更にミュラーは以下のように当時を振り返ってその夜の出来事が人生のターニングポイント（turning-point in my life）であったと記している。

帰り道、ベータに言った。「スイスの旅で見たすべてことや以前の喜びはすべて、今夜と比較して無きに等しい。」自分が家に帰って、神に跪いて祈れたかどうかは覚えていない。しかし、私は自分のベッドの中で平安で幸せに横たわっていた。そして、主が様々な方法でその働きを始めているようだった。私は心の深い悲しみもなく、ほとんど知識もなく喜びを手に入れたが、その夜主が私に恵みの働きを始められたことに疑いの余地はなかった。その夜が私の人生のターニングポイントだった。翌日と月曜日、そして週に1,2回、私は再びこの兄弟の家に行き、そこで彼と別の兄弟と一緒に聖書を読むようになった。土曜日に来るまで待つには長すぎたから。（Müller 1860 : 27-28）

こうして彼の人生は急転換する。これは「放蕩息子の帰還」であった。文字通り、キ

リスト教で言うところの「回心」（「改心」ではなく）であり、その後の生涯にわたって自分の「誕生日」として記念した日であった。ミュラーは公で1805年の誕生についてあまり語らないが、1825年の「新生」の誕生日については、常に公で語り続けている。最晩年に来日した1887年にもこの1825年の「誕生日」を強調して日本人へ語っている記録が日本で報道されている（木原2020）。いずれにせよミュラーは今まで味わったこともない喜びに満たされ、自分のこれからの将来についても思い巡らすようになった。そしてそれがただちに行動にも伴ってくる。年が明けて1826年早々には海外宣教の報告に関心を向けるようになり、自身の日誌のなかで神の御心として海外宣教師になる決意を固めるようになっていった（Müller 1860: 29）。

2-2. 父親から勘当

ミュラーは自分が回心してキリストに立ち返った証しと、そして将来は国教会の牧師ではなく、海外宣教師としてキリストに献身して生きたい旨を認めた手紙を、父や兄に送った。家族の者たちもきっと不良に明け暮れた「放蕩息子の弟」の回心を喜んでくれるものと思っていたが、ところがミュラーの予想に反して、父はミュラーの突然の回心、そして宣教師になりたいという息子の決意に激怒し、断じてそれを認めないという返事が返ってきた（Müller 1860: 29）。その後、二人は直接会ってこの件について率直に話し合ったが、この交渉は難航し、両者が譲歩しなかったため、その挙句、父は息子を勘当してしまったのである。この「勘当」というのは感情的問題だけでなく、結果的にミュラーのハレ大学神学部の学費や生活費のための仕送りすべて断たれてしまうはめになった。父としては息子が名誉ある国教会の聖職者に就くのを心待ちしていたゆえに、息子の言動は父親の期待を裏切ったと受け止められたのである。これはミュラーにとっては予想外の反応であったが、彼は、キリストに従う道として、父親へ不義理をしても、この決意は譲れない重要なものとなったと考えて自分の宣教師の道をすすめていった（Müller 1860: 29-30）。

一方で、彼はもはや大学の学費や生活費を父親から求めることができなくなり、実際の生活は苦境に陥ってしまった。そこで彼は神へ真剣に跪いて祈ることをはじめた。後にはじまる密室の跪いて祈る祈りの習慣がここにはじまる。不思議な方法で、祈りの答えを体験したと述べている（Müller 1860: 30）。それは当時アメリカから数名の神学者たちがハレ大学に客員教授、研究員として訪問することとなり、先述したように、多言語を使いこなすことのできる類まれな語学力をもつミュラーにハレ大学当局が白羽の矢をたて、その講義の通訳、翻訳などの仕事を依頼してきたのである。こうして大学から学費と生活費を充足するだけの収入を得ることができて、父親からの仕送りなしに残りの2年間は、不自由なく生活することができるようになった（Müller 1860: 30）。現代

で言うと、ティーチング・アシスタント (TA) やリサーチ・アシスタント (RA) という大学院生による教授の補助職務のイメージであろう。ちなみに、ピアソンによると、その教授陣の一人は後に著名となるプリンストン大学の神学教授チャールズ・ホッジ (Charles Hodge, 1797-1878) であったとされるが、ここで期せずして二人は既に出会っていたのである。(Pierson 1899 : 39 = 1964 : 33)

2-3. 決別した物事

ピアソンによれば、この他にもミュラーは同じ頃に結婚を考えた「恋人」との別れを経験したと述べている (Pierson 1899 : 36 = 1964 : 30)。自叙伝にはその記録はない。この記述はおそらくミュラーの死後に個人的に渡された書簡からと考えられるだけに信憑性は高い。ピアソンの記述では、ミュラーが好きになったこの女性というのは、クリスチャンであったが、ミュラーの海外宣教などのビジョンを共有できなかったという。ミュラーは数か月ほど悶々と悩んだが、最終的に彼女と別れる決意をしたというのである。すでに父 (家族) とも決別し、そして恋人とも決別したことで孤独になったが、より一層神に生涯を捧げて生きる決意が固まっていったようである (Pierson 1899 : 36 = 1964 : 30)。

またピアソンは、ミュラーの世俗との決別についての興味深い一つのエピソードを記している。ミュラーが回心する前にフランス文学のある作品をドイツ語へ翻訳してその原稿を完成させ、それを出版社に持ち込んで相当の収入を得る段取りとなっていたという。特に父親に勘当されて生活費を断たれた貧しい学生としてはこの収入はありがたいものであったのであろう。しかしそれを実行しようとしていた間に、ミュラーは随分悩み始めたというのである。ミュラーの理解ではこの本のような「世俗的ものを出版することが神の御心ではないのではないか・・・」(Pierson 1899 : 34 = 1964 : 28) と自問しはじめたのである。その挙句に、苦悶のうちに、出版契約を自ら破棄して翻訳原稿すべてを焼き捨てたというのである。ここにミュラーの徹底した潔癖な性格が示されている。幻のミュラー訳の翻訳書が一体何であったのか興味深い、そのタイトルすら今となっては判明しない。実はこのエピソードは、石井十次が孤児事業に専念するにあたって、医学部卒業間際に医学書をすべて焼き捨てて、医師になることを断念したということに影響を与えている。「日本のミュラー」になろうとした石井は自分の人生のベストを選択するために、ベターなものを捨てる決心をミュラーに倣って行ったというのである (木原 1998)。

2-4. アドリブ説教

日誌には 1826 年 8 月 27 日に説教に関して将来の確信にいたる出来事があったようで

ある (Müller 1837 N : 35)。それはある教区の教会で臨時的に説教することを依頼された時のことである (ミュラーはすでにハレ大学の神学生として説教する資格を正式に得ていた)。ところが、そこでは、公での講壇説教に対する自信のなさもあって、すでに印刷された著名な説教者の説教原稿をほぼ暗記してそれを語ることでその役割をなんとか担った。しかし、その直後、そのことについて良心の呵責を感じて悩んだ。ところでその日、何らかのアクシデントがあって同日の午後の礼拝説教を急遽臨時に依頼された。依頼した側は、午前の説教をそのままリピートして語ってもらえるというリクエストだったようであるが、その時、ミュラーは、神がマタイ5章を自分の言葉で語るように強く示されたと感じ、直前までも悩みながらも結果的に導かれるままにたどたどしくではあるが自分の言葉ではじめて説教をした。これはミュラーにとって午前中の説教とはまったく異なっていて、彼にとっては平安と大きな喜びと祝福があったという (Müller 1837 N : 35)。以降、この経験は生涯にわたって、「聖霊に導かれて説教をする」というスタイルとして、彼のなかでは記憶すべき最初の出来事であったと自叙伝に記している (Müller 1860 : 32)。後にブラザレン運動の働きに参画するようになるミュラーにとってこれは後の説教スタイルの原型となるものであった。

3. ティンマスでの療養と出会い 1826-1829

回心したミュラーは、結局、父親の期待する国教会の聖職者になることなく、海外宣教師となってイギリスへ渡る。そこで更なる神学的訓練を受けることになるが、体調を崩してティンマスで療養することを余儀なくされた。そこでその後ブラザレン運動にかかわる盟友ヘンリ・クレイクや伴侶となるメアリー・グローブスと出会うことになる。

3-1. 海外宣教の夢

回心したミュラーはハレ大学でこれ以上更なる高度な神学研究を続けるよりは1827年に海外宣教へ志願する決意をすることになった。敬虔主義の立場に立つ著名な神学者トールク教授 (Professor Tholuck) がハレ大学に数年前に就任していたこともあり、ミュラーは将来の海外宣教についても相談をしていた。トールク教授とは、卒業後も恩師として交流を続けている。そしてトールク教授の推薦によりルーマニアのブカレストへの宣教師の働きの候補者になったが諸状況によりそれは不可となった (Müller 1860 : 35)。その後、ロンドン宣教協会 (the London Missionary Society for promoting Christianity) のポーランドのユダヤ人への宣教に応募することとなった。なぜ、ミュラーがユダヤ人宣教を希望したかは必ずしも明確ではない。一つにミュラー自身が卓越した多言語運用能力があることはすでに述べてきた通りであるが、ミュラーの言葉を借りれば

「ヘブル語がとりわけ好きだった」(I became exceedingly fond of the Hebrew language) (Müller 1860: 36) ようで、このことが一つの理由であったようである。

さて、このロンドン宣教協会は、ミュラーに対してロンドンの神学校で6か月間宣教師としての特別訓練を受けることを条件に彼のロンドン派遣を決定した。ところがミュラーの国籍のあるプロシアの法律では、3年間軍隊(大学に入学したものは1年)の訓練が義務づけられていたため、ミュラーは軍隊入隊経験がなかったため海外在住のための滞在ビザの認可が降りないことがわかった。しかしその時ミュラー自身体調を崩し、胃潰瘍のような症状となり、医師の診断により終身兵役免除の扱いとなった。それゆえ宣教師として英国在住のビザの許可が降りることとなる(Müller 1860: 38)。

このような経緯を経て1829年2月にロンドン宣教協会の要請に応じてロンドン行きが決定した。ロンドンへ向かう途中で故郷に立ち寄り、勘当されていた父とも久しぶりに再会している(Müller 1860: 39)。既に父は税務署の役人の公職を退職していた。息子のミュラーが宣教師になることをめぐって父より勘当された経緯は既に説明した通りであるが、このような過去のわだかまりがこの再会で払拭されたかどうかは別として数日間、父のいる故郷に滞在をしている。このことについてミュラーは特段、事実関係以上には何も触れていない(Müller 1837 N: 54-55)。

3-2. ロンドン宣教協会での訓練

アムステルダム経由で3月19日にロンドンに到着した。こうして神学校においてユダヤ人への宣教師として訓練を受ける生活が始まった。この神学校では一日12時間の座学があったが、聖書のヘブル語だけではなく、現地で通用できる会話能力としての現代ヘブル語のトレーニングをも集中的に受けることになった。そこではヘブル語で旧約聖書の大部分を丸暗記するというトレーニングもしたというからその訓練は相当のものであったようである(Pierson 1899: 54=1964: 47)。

ミュラーはドイツ人であるから、説教者として英語(ミュラーにとって外国語)についても説教等に支障がないよう訓練がなされた。こうしてノルトハウゼン校、ハレ大学神学部において独仏ラテン語という習得言語に加えて、このロンドンの神学校で英語、ヘブル語、ギリシャ語が加わり、ミュラーの多言語能力が更に集中的に磨かれることとなった。ただし、ミュラー自身によれば他の原語と比して英語が苦手であったと述べている(Müller 1837 N: 55)。後にこれは彼の比類なきほどの聖書の釈義研究、そしてイギリスでの海外宣教に直結することになった。

しかし残念ながら1829年5月に、以前の(おそらく胃腸系の)病気が再発したようで体調が悪化し、今回は軽症ではなく、再起不能と自覚し死線を越えるほどであった(Müller 1860: 40)。この時、身体的症状だけではなく、自叙伝によると、過去の罪の意

識に苛まれ精神的にも苦闘したと記されている (Müller 1860 : 40)。ここでの罪の意識とは、おそらく少年時代から青年期の放蕩した挙句に投獄された罪深い生活、母の死に際しての「泥酔事件」、父との確執のことなどであろう。心理学的に言えば過去の出来事がある病気をもとに誘発されてフラッシュバックしたということであろう。しかし同時にそのようななかでこそ、神の完全な赦しと恵を改めて体験する機会となり、むしろそれゆえにますます神に頼り、神へ深く祈る内面的な信仰へと進むきっかけとなった (Müller 1860 : 40)。

3-3. ティンマスでの転地療養

この病状はなかなか回復せず、病状がかなり深刻となり、短期間では治らず、また精神的にも相当に辛い状況であったため、所属団体のロンドン宣教協会にも勧められて転地療養のためにロンドンから南にあたるデボンシャー州 (Devonshire) (現在のデボン州 Devon) の南岸の港町のティンマス (Teignmouth) で療養することになった (Müller 1860 : 41)。実はこの地こそ、生涯の転機となるブラザレン運動に連なる場所となり、またその盟友となるヘンリー・クレイク (Henry Craik, 1805-1866)、そして妻となるメアリー・グローブス (Mary Groves, 1797-1870)、そしてブラザレン運動の草分けグローブス (Anthony Norris Groves, 1795-1853) との「運命」的な出会いの地になるのである (木原 2019)。

正確にはティンマスでは未だブラザレン運動として確立したものがあったというよりその萌芽のような状況であったというのが正確であろう (木原 2019)。そのブラザレン運動の萌芽の頃のすではじまっていたエベネゼル集会 (the chapel, called Ebenezer) でのキリスト者たちとの交わりを通じて、次第にミュラーは自分がこれまで神に頼っていると信じていたが、実は神以外のもの、つまり人間的組織を第一に頼りにしてきたことを自覚しはじめる。そしてロンドン宣教協会の組織と自分の関係について再考するようになっていった (Müller 1860 : 41-42 ; Pierson 1899 : 59 = 1964 : 52)。ミュラーは協会と諸種のやりとりをして自分の想いや疑問を伝えているうちに、協会としてもミュラーの言動を必ずしも善しとはしなくなっていくようである。そしてミュラーは悩んだ末 1829 年 12 月にロンドン組織協会と決別することとなる (Müller 1937 N : 68)。協会からすれば事実上、ミュラーを宣教師として解任したということになる (Pierson 1899 : 59 = 1964 : 52)。自叙伝では、「ミュラー氏は 1829 年暮れに、ロンドン協会の支援のもとで継続的財政支援に疑問を持つようになった・・・」(Mr. Müller was led, toward the close of 1829, to doubt the propriety of continuing under the patronage of the London Society) (Müller 1860 : 43) という文章を編集者が挿入的に記している。ここについてそれ以上詳しく記載していないが、彼が具体的に何に疑問を持ち、拘っていたのか十分には

わからないが、一つには宣教師として団体から一定の給与を受けることに躊躇したようである。彼は宣教にあたって自由に独立して献身する身のほうがよいと考えたのであろう。実は当時のブラザレン運動の集いでは、国教会の牧師や司祭など聖職者であった人たちなどが既存の教会組織から出て、独立型の伝道者として自由に働きを始めていた（木原 2019）。つまり、ミュラーはそれらの集会で宣教師や伝道者であっても、一定の給与をもらわずに献身していることを知ったことが大きいと考えられる（Müller 1860 : 41-42 ; Pierson 1899 : 59 = 1964 : 52）。

当地ではじめて出会ったブラザレン運動の最初の印象を以下のように綴っている。

ティンマスに到着してから数日後、エベネゼルと呼ばれる礼拝堂で集会が開始された。私はそのオープニング式に出席した。その際にそこで説教をしていた一人にとっても感銘を受けた。彼の話すことすべてが気に入ったわけではなかったが、その荘厳さと厳粛さが他の人とは違っていた。彼が説教した後、私は彼のことについてもっと知りたいと強く願った。そして、彼が滞在していたエクスマスにある集会の二人の兄弟に招待されて、彼らと一緒に時間を過ごすことができた。そして彼と同じ屋根の下で 10 日間暮らす機会が与えられた。（Müller 1860 : 41）

1829 年 12 月 30 日にエクスマス集会（Exmouth）を訪れ、そこでキリスト者の交わりの喜びを伝えている。そして 31 日にはミュラー自身がその集いで、「キリスト者であることと、幸せなキリスト者であることの違い」というメッセージを語った（I spoke on the difference between being a Christian and a happy Christian）（Müller 1860 : 44）。それがきっかけで、ブラザレン運動の影響で始まりつつあったティンマスの諸集会から説教を依頼されるなど新しいミュラーの独立伝道者の萌芽がここにみられることになる。これはミュラーが自分の意思で選んだのではない。むしろロンドンで病に伏し、その療養先のティンマスが彼にとっての人生の転機になっていくのである。「この私の最初の証しは多くの信者たちに祝福となった。神が私とともにおられることをお示しになった」（This, my first testimony, was blessed to many believers, that God, as it appears, might show me that he was with me.）（Müller 1860 : 44）と述懐している。その日の日誌は以下の通りである。

12 月 30 日 私はエクスマスに行った。そこでは、クリスチャンの友人の家で 2 週間過ごすつもりだった。12 月 31 日、エベネザル礼拝堂での祈りの集会が始まる 1 時間前の夕方 6 時にエクスマスに到着した。私の心は、主のすばらしさを伝えたいという想いで燃えていた。しかし、話すことも祈ることも求められなかったので、私は黙っていた。翌朝、私はクリスチャンであることと幸せなクリスチャンであることの違いについて話し、私たちが主をあまり喜ばないことが一般的にどこから来るのかを示した。この私の最初の証しは多くの信者たちに祝福となった。そして神が私とともにおられることをお示しになった。（Müller 1860 :

43-44)

4. 「イエスに頼る」訓練 1830-1832

ミュラーは、神へ献身する決意をして海外宣教に出かけることになった。それは当時ドイツで尊敬され、安定した生活が保障されている国教会の「職業牧師」を断念することを意味していた。結果として更に大切にしてきた3つのものを捨てることになった。すなわち、①派遣団体であるロンドン宣教協会、②恋人（女性）、③父からの学費含めた経済的支援、である。これは彼にとって簡単に「断捨離」できたのではなく、想像以上に辛い体験であったようである。これらを通じて1830年からの数年は、徹底的に「イエスに頼ること」を訓練される期間となったと振り返っている。

4-1. ティンマスでの働き開始

先述したようにミュラーは、すでにハレ大学で神学を学んでいたため、当時のプロシア（ドイツ）でも、教会の講壇において牧師として説教ができる「資格」を有していた。当時のドイツでは、「説教」は、法律で定められ、聖職者の「資格」は、名称独占ではなく、現代の法律用語で言えば医師国家資格のように業務独占であった。こうした規制や風潮が、この資格の「職業としての」価値を高めただけでなく、それを得るために裕福な家庭の男子が、医師、弁護士、聖職者（国教会の牧師）という業務独占の国家資格の三職を求めて職業選択をする傾向になった。聖職者がそのような職業として位置づけられていたことから、結果的にそれが「信仰」的選択とは異なる職業選択となり、牧師職の世俗化の温床にもなったようである。

ところが、ミュラーはここでも将来を展望する大きな決断をしていくこととなる。彼は先述した通り、イギリスへ宣教師として働くためにすでに訓練中であったが、派遣団体であるロンドン宣教協会を離れて（解任されて）、独立した巡回伝道者のような働きをイギリスで模索していた頃であった。そこで学びの時として、彼によると「主からの訓練」としての幾つかの経験をした（Müller 1860: 45-63）。

滞在先のデボンシャー州（Devonshire）のティンマスのエベネゼル集会（Ebenezer Chapel）では、彼は巡回伝道者のような形で説教を依頼されることがあったが、その評価は二分されていた。そのあたりの様子が以下のように記されている。「次の週の間、M氏はほぼ毎日同じ場所で祝福されながら説教した」（Müller 1860: 46）が、必ずしも皆が歓迎したわけではなかった。彼がある集会で説教をした際に、聴衆のうちから彼の説教への反対が起こった。ドイツ人であるミュラーが母国語でない英語で説教をしているというハンディもあったし、彼はいわゆる雄弁と言えるようなタイプの説教者ではな

かったことは自覚していたが、彼の説教への反感、反対の理由は、そうした言葉の問題だけではなかった。ミュラーの説教の内容と方法が聖書を字義通りに釈義する保守的なオーソドックスなスタイルであることによった。当時の「流行」であった「人を喜ばせるような」感動的な興味深い説教内容でなかったからであると自己分析をしている (Müller 1860 : 46)。

ただし、自分を評価しない人がいるという事実に対して、ミュラーは、通常とは異なる反応を示している。一部の反対者がいることは、実はサタンの働きである可能性もあり、むしろ自分はしばらくそこに留まり続け、反対されてもその集会から公然と納得できる理由で排除されるまでは神の言葉をそこで語るべきだと祈りのうちに神から教えられたというのである (Müller 1860 : 46)。ミュラーの判断は、一般で考えるものとは大きく異なるようであるが、「人間の評価を基準としない」と公言した使徒パウロを彷彿とさせるものがある。

一部の反対はあったとはいえ、多くはミュラーの人柄とその説教に励まされ彼を歓迎していたのも事実である。そこで、彼は、最終的に「神の証人としての自分を公式に拒絶するか、あるいは別のところへ移るべきという明確な神の導きがあるまでは、一時的にまだここにとどまるべきであると決意」(Pierson 1899 : 6 = 1964 : 56) をして、そこに滞在し諸集会の説教者として招聘されることになった。結果的に生涯の働き場となるブリストルへ移動するまでミュラーはここに留まり続けることになる。

4-2. ミュラーの再洗礼

ここで、もう一つ重大な問題が彼に迫った。それはバプテスマ (洗礼) についての議論であった。当時のドイツ国教会では、幼児洗礼、堅信礼という教会の儀式が一般化されており、当然のように聖職者になろうとしたミュラーも幼児洗礼を受け、そして15歳の時に堅信礼を終えていた。再洗礼派 (Anabaptist) というような場合を除いて、ミュラーのような敬虔主義的立場に立つ者であっても、教会が権威をもって受洗させた者に対して、浸礼による再受洗をさせて、それしか認めないというような立場にはなかった。一方で、歴史的には再洗礼派に代表されるように、幼児洗礼は聖書的ではなく、それ自体が無効であり、自らの自由意志で信者になった者には、聖書に基づいて浸礼による再洗礼を行う必要があると主張していた者たちもいた。それは教会を二分するほどの議論であったが、むしろ再洗礼派のこのような主張は、ルター派のみならず、カルヴァン主義の改革派等の主流派は、急進的な動きをする再洗礼派の革新的な主張に対しては距離を置くようになっていった。

イギリスでも同様の議論があったが、そのような背景のなかでミュラーは、1830年4月にシドマス (Sidmouth) で説教をした後に、その集会に集っていた3人の女性信者た

ちからミュラーの洗礼について問題を提起された (Müller 1837 N : 76-77)。当初は、ミュラーは自分自身も当時の時代の主流派と同じく、信者の再洗礼に否定的であったので、その場では「必要ない」と告げたが、その女性たちから聖書の根拠を問われ、神の前に明確な回答を求められているように思えた。そこでミュラーは、改めてこの問題について一端自分の考えを白紙にして聖書から徹底的に熟考することとなった。「祈りながら聖書を調べた結果、バプテスマというのは本来浸礼によってのみ行われるべきであると確信したので、ミュラー氏は1830年の春にバプテスマを受けた。」“Becoming convinced, after a prayerful examination of the Scriptures, that baptism should be administered only by immersion, Mr. Müller was thus baptized in the spring of 1830” (Müller 1860 : 51) と自叙伝では編者ウエイランド (Wayland) が挿入文章を記している。自叙伝はこの観点についての記載は詳しくないが、機関誌及びピアソン著にはその経緯と顛末が記されている (Müller 1837 N : 76-80 ; Pierson 1899 : 67)。

彼は結論として、自らの「過ち」を認めて、1830年に公に再受洗した (Müller 1860 : 51)。「牧師の再受洗」という前代未聞の行動に対して影響と余波は小さくなかった。当初、信者や友人からその行為が非難されて、彼のもとを離れていくのではないかと懸念されていたが、結果は多くの人々がミュラーの真摯な態度と行動を好意的に受け止めたようである。これもミュラーの信仰と性格とを伝えるエピソードの一つであろう (Müller 1837 N : 76-80 ; Pierson 1899 : 67)。

ただし、彼は自らの意思で再洗礼をしたが、それを他者に強要することには強く反対であった。その後、ブラザレンの諸集会でもこの問題が再燃した時、むしろそれを強要する指導者に対して強く反論している (木原 2019)。このことからミュラーの洗礼に対する理解が明確となるが、あくまで、再洗礼は、絶対普遍の真理ではなく、個人と神との関係において各自がその良心のうちに判断して捉えるべきであると理解していたことがわかる。つまり、この問題は教会が教理的に判断をするのではなく、個人がいかに判断するかが大切であるという立場を貫いたということであろう。

4-3. 一定の給与を得ることの放棄

1830年はミュラーにとっては更なる訓練の時期であったが、その基本として再洗礼の場合と同様に、当たり前慣例的に行っていることであっても常に先入観を白紙に戻して、原点としての聖書に照らして再検討、再吟味する姿勢を徹底していった。その一つに礼拝形式においても聖日ごとの聖餐式ミュラーは(「パン裂き」‘breaking bread’ と表現している)をするというのは使徒時代の初代教会から行われていた祝福されたものであり、それを継承して教会が行うことは重要であると確信するにいたったのもこの時期である。これが今日にいたるブラザレンの「儀式」にも直結してくる。

もう一つ重大な決断がミュラーのなかで行われた。それは牧師（者）としての一定の給与を教会から貰わないという決断である。これには当時の教会の背景の説明が必要である。牧師へ給与を与えるために、当時の国教会では座席使用料を徴収するのが一般的であった。ところが、その座席ごとにその徴収金額が異なり、結果的に裕福な者は「上座」「良い席」を占め、貧しい者は「下座」という悪しき慣例が平然となされていたようである。このような差別的や階級制度的な側面が教会内で暗黙のうちに助長される仕組みの悪習慣の温床が座席使用料制度にあり、それを原資に牧師の給与が賄われていたのである（Pierson 1899 : 68-70）。

ミュラーはそのような差別的態度は「ヤコブの手紙」2章 1-6 節が示す通り、教会にとって悪しき慣習であると思うようになった。また座席使用料をそのような差別意識で使わなくても、自由意志でない支払い方法が献金の在り方を教える聖書の真理に反していると考えるにいたった。更に、このような一定額を支払う大半のお金が牧師の給与になることにより、説教者はその信者に付度をして、聴衆におもねて神の言葉を大胆に語る事が妨げられるのではないかと懸念した。あたかも観客を喜ばずコンサートのような態度に陥りかねないと危惧したのである。こうして彼は、大胆にも 25 歳の時、教会（集会）において一定のサラリーとしての給与を放棄するという宣言をするに至った（Pierson 1899 : 68-70）。

ミュラーは以下のように語っている「これらの理由により、1830年の10月末に、私は、集会の兄弟姉妹に対して、いかなる定められた一定の給与を今後一切貰わないことにする、とお伝えしたのである」（For these reasons, I stated to the brethren, at the end of October, 1830, that I should for the future give up having any regular salary.）（Müller 1860 : 51）

このことは、生涯貫かれる原則となる。そして後の孤児事業においてもまったく同様の方法がとられる。それではどのようにして献金はなされるべきなのか。代替案として直接牧師へ献金を捧げる方法が模索されたが、それは献金額も含めて信者の自由意志であるとはいえ、誰がいくら捧げたのかが特定されるなどの弊害あるとわかってきた。そこで最終的に礼拝堂に献金箱を備え付けることにした。信者は無記名で自由に捧げるスタイルで、ミュラーはそれを神からの捧げものとして受けとめた（Müller 1860 : 52）。基本的に彼はこのスタイルを生涯とり続けた。今日でも多くのキリスト集会で同様の方法がとられているようである。

4.4. メアリー・グローブスとの結婚

ミュラーは1830年10月7日結婚する。相手はメアリー・グローブス（Mary Groves, 1797-1870）であり、インドやバクダートに宣教に行った初期のブラザレンの祖ともい

われる伝説上の人物グローブスの実の妹である (Müller 1860 : 52)。1870年に彼女が亡くなるまで二人は、良きパートナーとして、一切の事業を共に展開することになる。特に後述する孤児事業においては「孤児の母」としての彼女の功績は計り知れない。ミュラーは自叙伝には結婚での出会いの経緯についてあまり詳細を記していないが、年齢的には8つ年上の女性で、誠実で敬虔な女性であったと記録に残っている (Pierson 1899 : 71)。結果的に彼女を通して実質上、ミュラーはブラザレン運動の中心に導かれていくことになる。彼の義理の兄グローブスがブラザレン運動の先駆者であり、リーダーであったからである。

ところが、翌年1831年8月9日に妻メアリーは死産を契機に一時危篤状態となる (Müller 1837 N : 90)。ミュラーにとってもこれは試練の時期であったが、彼はこの出来事を自らの罪の悔い改めとして機関紙を通して告白している (Müller 1837 N : 90)。それによると自分が仕事に熱を入れるあまり、夫としてあるいは父親として出産する妻への配慮に全面的に欠けていたこと、「子供は重荷であるとすら考えていた」 (Müller 1837 N : 90 ; Pierson 1899 : 74) ことを無意識ながら思っていたことを自らの闇の部分として神に示されたと、その罪を告白する形で反省文を公に残している (Müller 1837 N : 90 ; Pierson 1899 : 74-75)。ミュラーがこのような内面すらも公言して伝えることは、彼の人柄を物語るものであろう。

4-5. 極貧の托鉢的生活

ミュラーは自叙伝にこの頃の新婚生活の凄まじいほどの貧困生活を赤裸々に語る。特に、牧師(牧者、伝道者)としての一定の給与を放棄したという方針により尋常ではない貧しさを体験することになる。生活費が底をついたエピソードを持ち金の残額の具体的な金額まで含めて日誌のなかで語っている。しかし、一方で、必要な時に、神からの献金が祈りに応じて確実に届けられたことを淡々と記述している。結婚のエピソードは自叙伝にはわずかなのに対して、このエピソードは多く記載している (Müller, 1860 : 56-62)。たとえば日誌には以下のように記している。

1831年2月14日

私たち夫婦は、再びお金が底をついた。そして神へ祈っているなかで、私は主が恵深く我々の不足を補ってくださるよう求めるように導かれた。私が跪いて祈り終わったその瞬間、主にある兄弟が献金箱に捧げられた1ポンドをもって来てくれた。(Müller 1837 N : 85 ; Müller 1860 : 56)

1831年4月16日

今朝、3シェリングしかないことがわかった。今、正直に主のもとに出て、肉の糧を求め

なければならぬと、独り言をつぶやいた。しかしそう祈る前に、エクスターから2ポンドが送られたことを知った。求める前に主が願いを聞かれたことの証しである。(Müller 1837 N : 86 ; Müller 1860 : 57)

5. ブリストルでの宣教開始 1832-1835

療養先のティンマスでブラザレン運動を知り、そのかわりのなかで人間的組織ではなく、神のみに頼ることを考えるようになった。結果的にミュラーは派遣団体であるロンドン宣教団体を離職して、ティンマスで独立して宣教の働きを担うことになった。しかし、そこでの滞在と働きも長くはなく、次のステップ、つまり最終地となるブリストルへの働きへと進んでいくことになる。

5-1. ブリストルへ

1832年4月13日、すでに療養先のティンマス時代より盟友になっていたクレイクが、しばらくブリストルへ巡回伝道の働きへ出かけることになった。そしてブリストルのクレイクよりミュラーへ手紙があった。それによれば、クレイクはミュラーに対してブリストルでの開拓伝道を共同でしないかという思わぬ招待であった (Müller 1860 : 65)。

その依頼に心動かされたが、即断を避けた。このことに対して検討すべく、ミュラーはティンマスを一時的に離れて、クレイクのいるブリストルへ向かうことにした。彼は、ブリストルでの宣教の働きに自分が神より召されているのか、つまり自分の願望や意思ではなく、それが果たして神の意思かどうか真剣に思案しはじめた。先述したように、ティンマスでは、ミュラーの宣教の働き（特に彼の説教）を必ずしも良いとは思わない人々もいたことは述べた通りであるが、それでも逆に反対する人がいることだけでは判断せずに、明確な導きがない限り、むしろそこでしばらく留まるべきであると決意をしていた。しかし、今回の盟友クレイクからの依頼を受けてのブリストルへの移転ということについて改めて妻と相談して夫婦で祈り、考え、黙想して判断に悩む期間となった (Müller 1860 : 65-67)。

そんな折、1832年4月22日の日曜日に滞在先のブリストルにあるギデオン礼拝堂で説教することになった (Müller 1860 : 67)。ピアソンは「この日付と事実、偉大な働きへ用いられるようになった人生の新しい転機」(Pierson 1899 : 68-70 = 1964 : 87) と記している。「その後の66年間が、ブリストルという場所は彼の名とは切り離せない深い関係を持つようになった」(Pierson 1899 : 68-70 = 1964 : 87) からである。当初のギデオン礼拝堂は非国教徒としての超教派的な集まりの教会であり、そこに若き「牧師」とし

てクレイクとミュラーを招聘するという形式であったようである。その意味では当初からそこに既にブラザレンの集会があったわけではない。

5-2. クレイクとの共同牧会

ミュラーはドイツ人であったこともあり英語での説教に苦手意識をもっており、ドイツ語であっても聴衆を魅了するような形式の説教ではなく、少なくともいわゆる雄弁家ではなかったようである。クレイクのほうが自分よりも説教者として優れていることを率直に認めている (Müller 1860 : 68)。ただし、それは妬みという感情よりも、クレイクへの尊敬と自分自身への反省を込めてのものであった。これらもミュラーの生き方の特徴であるが、彼は他者の賜物や才能を喜び、そしてそれが用いられるように祈ることができた (Müller 1860 : 68)。同時にクレイクが持っている自分にはない未信者や求道者への接近方法、熱意など、彼の伝道の態度と方法を手本として学ぶことができた。そして自分の欠点や自分に不足している点についても素直に認めている。そしてそれらが少しでも改善することを通して「神の栄光となるように」願い求めて祈っていると、1832年10月1日付の日誌にある (Müller 1860 : 68)。

通常、組織のなかに二人の才能のある人物が共存することは難しいと言われている。なぜなら互いがライバル視するか、妬みにより、競いあって結果的に共同できないからである。これは一般社会でもそうであるが、実は宗教界も例外ではなく、いやむしろそれによって互いに支え合うどころか権力闘争のようなことになりかねない悲しい現実はいましばしば目にする。古くは、福音書のなかでイエスの弟子たちの間で「誰が一番偉いのか」という「論争」に、イエスが叱責したこともあった。

ピアソンは、このミュラーの葛藤と祈りを「へりくだりを学ぶ機会に恵まれた」(Pierson 1899 : 68-70 = 1964 : 88) と述べ、また「低い心を持ち、低い位置に甘んじ、存在が認められないような立場を満足できる人を、神はより高く引き上げ、より強い影響をあたる立場におかれた」(Pierson 1899 : 68-70 = 1964 : 88) と結論づけている。二人にとってはこの関係は生涯続くことになり、結果的にそれがベテスダ集会での働きを躍進させていく原動力になる。

生涯の盟友であった二人は1805年生まれの同年齢であり、クレイクは1866年に死去するまで、ブリストル集会での立場は、共同牧会とは言え、實質上は、クレイクが代表的立場であった。ミュラーはこのような自分の位置づけを快く受け入れていた。孤児院の働きはミュラーが中心であった。しかし、その後、先にクレイクが1866年に死去した後、ミュラーはその後30年以上にわたって長寿を全うし、ベテスダ集会、孤児院、海外宣教のすべてにおいて中心的な役割を担わざるをえなかった。彼自身がそれを望んだわけではなかったが、結果的に「孤児の父」、「世界的大伝道者」として、輝かしい

「信仰の偉人」としての名声を歴史上において残すことになった。

5-3. ベテスダ集会での開拓伝道

こうして、ミュラーはブリストルの働きに神の導きを確信し、すでに牧会を始めていたデボンシャー州のティンマスを離れる決意をした。その集会の信者たちと「涙の別れがあった」(Müller 1860:67) ことも日誌(1832年4月27日付)に記載している。そしてギデオン礼拝堂でクレイクと共に共同牧会に従事することとなる。その際、既にそこに集っていた会衆がこれまでもっていた規則をすべて廃止し、デボンシャーの集会で新たに取り決めた方法、つまり教会での座席使用料を取らないこと、牧師としての一定の給与は取らないこと、そして教会の「牧師」のような立場はとらないこと、つまりは今日でいうところのいわゆる「ブラザレンのやり方」ですすめることを条件にして、それを総会により会衆が認めたことで二人はそこでの働きをすすめることとなった。

その同じ頃、同じくブリストルに市内2番目に大きな会堂であるベテスダ礼拝堂があったが、諸事情により当時使用しておらず、ある一人の信徒によってその礼拝堂がそのまま自由に集会場として使えることがわかった(Müller 1860:68)。1832年8月13日日誌には、ベテスダ集会が開拓伝道としてはじまったことも記されている(Müller 1860:72)。ここでミュラーとクレイクの二人は、神の導きを感じて新しい集会をこの礼拝堂でも開拓的にはじめることを決意した。これこそが、後のベテスダ集会のはじまりであり、生涯にわたってクレイクとミュラーが共同牧会する活動の拠点となった。

ここに集ったのはクレイク夫妻とミュラー夫妻ともう一人の男性信者(兄弟)、2名の女性信者(姉妹)の7名からなる小さな集いであった(Müller 1837N:108)。「なんの手引きもなく、ただ新約聖書だけに従って、単純な使徒的な教会を築きあげてゆくという聖なる仕事に従事するようになった」と記載している(Müller 1860:72)。

その後8年後の1840年に前者のギデオン礼拝堂の働きからはミュラーとクレイクは撤退して、ベテスダ集会の働きだけに専念することになった。ギデオン撤退の経緯は詳しい事情を知る記録が乏しいが、ベテスダ集会はゼロからの開拓伝道であったのに対して、ギデオンは、当初から非国教徒の教会に多数の信徒がいたことが出発の時点で大きく異なっている。ギデオンでは既存の教会に二人が牧会者として招聘された形であるが、その信徒たちがミュラーとクレイクのいわゆるブラザレン形式の牧会方法に違和感を覚えたことと、ミュラーたちにとってもそこでの牧会上の運営において信徒と確執をなくすことにエネルギーを費やすことは神の御心でないと判断したようである(木原2019)。

さて、二人の宣教の働きはブリストルでの信徒を覚醒させ、この年だけで260名の信者が回心して新たに加えられるなどその顕著な働きが見受けられる(Müller 1860:74)。

ミュラーが死去する時にはベテスダ集会は、1200名の信者がおり、他にもここから10の群れ（集会）に株分けするなどブリストルを代表する集会（教会）となった。ただし、第二次世界大戦中にはドイツの空爆を受け、ベテスダ礼拝堂の建物は完全に崩壊してしまう。現在、再建したが、それはアルマ教会（Alma Church）として引き継がれている。（Alma Church 公式サイト参照）

5-4. 娘の誕生、コレラ、フランケ自伝

1832年は、欧州全土にコレラが蔓延し、ブリストルでも多くの死者が出るなど試練の年となった。1832年7月13日付の日誌にコレラ感染が最初にブリストルであったことを記している（Müller 1837:106）。特にパリで感染が酷く、多くの市民が感染により死亡したようである。ベルリンでも哲学者ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）が、パリでカジミル・ペリ首相（Casimir Périer, 1777-1832）が、このコレラに感染して命を落とした。ブリストルにおいても多くの市民の命が奪われたことをミュラーは記録している（Müller 1837:106）。

そのような危機的状況の1832年9月17日に娘リディア（Lydia）が誕生した。ミュラー夫妻にとって以前に最初の子供が死産したこともあり、娘の誕生は神よりのプレゼントであり慰めになったと、控えめながら記載されている（Müller 1860:72）。実は成長したこの娘のリディアが、ベテスダ集会のライト（James Wright, 1826-1905）と結婚して、夫婦で、ミュラーの孤児事業を継承することになるのである。

さてコレラは、世界的に蔓延し、義理の兄グローブスが宣教しているバクダート（イラク）でも被害が拡大した。コレラに加えて、洪水による災害も重なり、グローブスは、同時に妻と娘を失い、自らも病に臥してしまっていた。ミュラーとクレイクに、救援依頼があったが、二人はブリストルでの働きを着手したばかりであり、英国のコレラによる被害者への救済の責任もあるので、その板挟みとなった。バクダート訪問について神の意思を求めて祈ったが、結局、そこに行くことは神の導きでないと判断してバクダート行きは断念した（Pierson 1899:102=1964:92）。

5-5. 路上の貧しい子どもたちへの働き

同じ1833年2月9日付日誌には、ミュラーはフランケの自伝を読んだことを印象深く述べている（Müller 1860:72-73）。また、ミュラーが学生の頃に住んだハレという舞台、特に、数か月の間、このフランケの孤児院の宿舎で数カ月滞在したことなど、その点と点が結びつきつつあった。そしてそのことは、後のミュラーにとって孤児院構想のきっかけとなる（木原2019）。

同時にすでにこの頃、クレイクとともに日曜学校の働きの一貫として、貧しい子供た

ちに対して路上でパンを提供する活動をはじめていた。この活動により教会の路上には、朝になると貧しい子供たちが群がるようになった (Müller 1860 : 73)。そしてその子供たちへ聖書も教えるという働きが 1833 年 6 月 12 日に開始されたと伝えている。これはその後、高齢の貧困者もパンを求めて路上に群がるようになり、結局、近所の苦情もあったことでその働きは中止を余儀なくされた。しかしながらこの着想自体が孤児院構想の起源の一つとしては重要になっていく (Müller 1860 : 72 ; Müller 1837 N : 112-113)。

いずれにせよ、様々な出来事が重なる年となり、それらが、ブリストルを舞台にミュラーの孤児院事業に向けた助走になっていくのである。

6. 「聖書知識普及協会」設立 1834-1835

ミュラーのブリストルの孤児院創設年はいつであったとするのかを特定するのは実は難しい。一般的には実際の孤児院開始の 1836 年とするが、その前年に設立を決意したことで 1835 年とすることもできる。しかし実は 1834 年に設立した聖書知識普及協会こそは、孤児院を支える法人の設置年であり、その意味ではこの法人が誕生した 1834 年を孤児院創設の起点とすることもできる。

6-1. 「聖書知識普及協会」

いずれにせよ、ミュラーにとって 1834 年は孤児院事業設立の事実上の準備の起点となったと言える。なぜなら、将来の孤児事業の母体となる組織・法人としての「聖書知識普及協会」(The Scriptural Knowledge Institution for Home and Abroad, 以下 SKI) を創設させた年であるからである。むろん、この時点では孤児構想がすでに具体的にあって、この団体を設立したのではない。

1834 年 2 月 21 日の日誌にミュラーは SKI の構想を明らかにしている (Müller 1860 : 77)。この日誌からすると、当初は、その団体について「福音を国内外に広めるための団体」(an institution for the spread of the gospel at home and abroad) (Müller 1860 : 77 ; Müller 1837 N : 118) としており、国内と海外の宣教の支援団体というイメージが強い。この団体は、ミュラーが単独で創設させたのではなく、教会(集会)においても共同で牧会をしているクレイクが共同発起人となっている。この団体で強調されているのは、すでにある既存の団体との差異(差別化)である。つまりは自らが立ち上げようとする新しい団体の独自性である。これについては機関誌、日誌でもかなり力説している (Müller 1860 : 77-83 ; Müller 1837 N : 118-125)。

同種のキリスト教系の団体はこの時代に既にあったようである。これらの既存の数多

くある団体に合流することも考えられたが敢えてその問題点を示し、自ら新たに独自の団体をつくる意義について詳細に機関誌等に記している (Müller 1837 N : 118-119)。ミュラーらの説明によると、端的に言うと、既存の類似のキリスト教主義の諸団体が必ずしも「聖書原則に基づいていない」世俗化した団体であるゆえ、それらとは一緒に行くことはできないという判断であった。たとえばキリスト教主義を標榜するとはいえ、既存の団体では、しばしばキリスト教徒と未信者が共同で仕事を担っていること、献金が信徒以外からも集められているなどである。今日のキリスト教主義の日本の社会福祉法人や NPO 法人などではあたり前になっているが、キリスト教慈善の源流であり、福祉先進国イギリスにおいても当時すでにその傾向にあったことを物語っている (Müller 1837 N : 118-125)。

そのようななかで、ミュラーらの書いた SKI の団体設立の趣意書は以下の通りである。全文は 7 項目からなる。そのまま引用しておく。

聖書知識普及協会 (SKI) の原則 (Müller 1860 : 81-82 ; Müller 1837 N : 122-123)

- ① 私たちは、キリストにある使命のために一人一人が行動する義務を負っており、信仰の働きと愛の働きに対する主の祝福を期待する拠り所として聖書を根拠としている。マタイ福音書 13 章 24-43 節、Ⅱテモテ 3 章 1-13 節、その他の多くの箇所を示す通り、主イエスが再び来られるまでの間、聖書の示すように、神の選民が集められる方法 (筆者注：麦に毒麦が混じっているたとえ) に基づき、主イエスが再臨される前に世界のすべての人全員が回心しているというようなことはありえないということ。
- ② 主が助けて下さるゆえに、私たちはこの世に対して後援を求めない。回心していない未信者、この世の地位のある有力者、富のある人々にこの団体を後援するように頼まない。なぜなら、このことは、主に対して栄光を帰していないと考えるからである。「神の御名により旗を高く掲げます」(詩篇 20 編 5 節：新改訳 2017)。主だけが私たちの後援者となり、主が私たちを助けて下さるのでそれによって私たちは発展する。主が私たちの側にいなければ私たちは成功しない。
- ③ 私たちは、未信者に献金を求めない (Ⅱコリント 11 章 14-18 節)。彼らが自身の意思で提供するならば、その貢献しようとする気持ちまでを拒否する必要があるとまでは感じていないが (使徒 28 章 2-10 節)。
- ④ 私たちは、この団体の業務を未信者が管理または遂行することを一切拒否する (Ⅱコリント 6 章 14-18 節)。
- ⑤ 私たちは、借金することによってこの事業を拡大するつもりはなく (ローマ 13 章 8 節)、教会に対しても自らが声をあげて助けを求めることすらしない。このことは新約聖書の書簡が示す精神に反対していると考えられるからである。すなわち、誰にも告げず密室で神に祈り、その願いの中で、神が私たちを助けて下さるので、私たちは団体の必要を主に願い、主が与えて下さるものによってのみ行動する。
- ⑥ 私たちは、与えられた金額や配布された聖書の数量などによって団体の成功の是非をはかることをしない。主の祝福によってのみはかる (ゼカリヤ 4 章 6 節)。私たちは、祈りの

中で主がなされることを待ち望みつつその助けを期待する。

- ⑦奇をてらうことを避けつつも、真理を損なうことなく、ただ単純に聖書に従って進みたいと願う。同時に、聖書の根柢に基づいて、神への祈りによって導かれた経験豊富な信者たちが団体の在り方に関して与えるどんな助言であっても感謝をもって受け入れる用意がある。

そしてまた、団体の目的が記されているが、これはどちらかというところ、目的というよりなすべき具体的な事業が3点にわたって示されている。

聖書知識普及協会 SKI 団体の目的 (Müller 1860 : 82-83 ; Müller 1837 N : 123)

- ①聖書の原則に基づいて指導が行われる学校、日曜学校、成人学校を支援し、また主があらゆる手段を与え、適切な教師を備えて下さり、またその他の点でも、私たちの道をはっきりと導いて下さるのならば、(自分たちでも)この種の諸学校を設立するようにする。これにより、貧しい子供たちもそのような学校で学ぶことができるようにする。

- a 聖書の原則に基づいた学校とは、教師が敬虔なクリスチャンであり、救いの方法が聖書に基づき徹底されており、福音の原則に反する指示が与えられていない学校のことである。
- b 日曜学校は、そのすべての教師が信者であり、聖書だけが指導の拠り所であるべきである。なぜなら、神を信じていると公言しない人が宗教的な指導をすることが許されるということは、非聖書的であると私たちは考えているからである。
- c 教師が信者でないのなら、聖書、新約聖書分冊、綴りの本などの提供に関して成人学校を支援しない。

- ②聖書の配布活動

- ③この機関の第三の目的は、宣教活動を支援することである。私たちは、ただ聖書のみに従って働いている宣教師を支援したい。

端的に言うと、この団体の理念は、シンプルであり、徹底的に聖書原則に基づき、神にだけ頼り、人に一切を頼まず、その支援に対する願い事すら教会にも呼びかけもしない。そしてその団体の担い手の運営者も、その団体のスポンサーもキリスト信者だけにより構成されるべきであることを大原則にしている。

その運営対象は、

- ①昼間学校、日曜学校、成人学校を支援し、あるいは自らそれを設置すること
- ②聖書およびその分冊を配布すること
- ③宣教師を支援すること

となっている。

ピアソンが「生ける神を唯一の後援者 (patron) とし、祈りだけを唯一のアピール手

段として、大きく発展し、その全世界的な働きは、祝し用いられるところとなっている」(Pierson 1899: 110 = 1964: 99) と述べる通りである。もっともピアソンがこのことを記載した時は団体発足からすでに 60 年以上経ってからであるが、ミュラーの死後、それから約 200 年を経た今日でも更に発展し続けて、SKI は現在キリスト教主義の大きな団体となっている⁽⁶⁾。

6-2. 貧しい児童への祈り

さて、このような事業面で 1834 年は重要な転機となる年であったのであるが、ミュラー自身の家庭生活においても 1834 年 3 月 19 日に長男エリヤ (Elijah) が誕生した祝福の年であった。子どもが二人目となったことから、これまでクレイク家と同じ屋根の下で両家は共同生活をしてきたが、これを機に世帯分離をすることとなった。

そのような中で、彼が孤児院をはじめのきっかけとも言える重要な出来事があった。10 月 28 日付日誌に記載されているが、今後の孤児事業にあたって重要事項を含む内容を記載する (Müller 1860: 84)。

10 月 28 日 私たちの学校の一つに通っていた一人の貧しい幼い孤児が、ブリストルから数マイル離れた救貧院 (poorhouse) に連れて行かれた。・・・(中略)・・・彼がもう私たちの学校に通うことができなくなったので心底から悲しんでいた。もしもそれが主の御心ならば、この少年が私たちの学校から引き離されたような苦しみをなくし、このような貧しい子供たちへの必要に応じて私が何かをすることができるように導いてください！

この日誌のなかで、当時の国家 (公的) 救済の象徴であった救貧法に基づくイギリスの救貧院 (poorhouse) について、貧民児童の関係で述べられている貴重な歴史的証言である。福祉国家の萌芽とされるエリザベス救貧法 (The Elizabethan Poor Law, 1601)⁽⁷⁾ は、1834 年に抜本的に改正されているが、折しもミュラーのこの発言は、この救貧法の改正された年である。貧しい孤児のために学校を準備しようとしたなかから、その貧しい一人の孤児が、当時の救貧院に連れて行かれたというエピソードは、ミュラーにとって心痛む出来事であった。実はそれが孤児院創設につながっていく契機になり、この日誌での発言は、ミュラーの人生にとっても、また英国の社会福祉の歴史においても救貧法と民間慈善 (孤児院) の関係を示している貴重な証言である。

6-3. ドイツへの一時帰国

さて、SKI の働きは当初から祝福され、支援者からの献金も確実に増えていく。それに伴い、クレイクと共に牧会する教会も急速に発展、成長を続け、1832 年に開始した集会 (教会) は、わずか 2 年半で 227 名が新たに信者に加えられるなど着実な成長を遂

げていった (Müller 1860 : 86)。

翌年の 1835 年にミュラーは義理の兄グローブスの宣教報告の通訳等のためにドイツを訪問することになった。そこで一つ問題が生じる。実は自らの海外在留資格としてのパスポートがすでに失効していたという「失態」が判明したのである (Müller 1860 : 87)。当時、これに対する制裁は、強制退去か罰金刑罰または収監ということであったが、興味深いのはこのような不始末があった経緯を言い訳することなく公に記載している点である。自らの過ちを素直に認めるとともに、自分の不注意を告白し、神の憐みにより、何の制裁もなく許されたことも併せて広報している (Müller 1860 : 87)。

さて、旅券失効の失態はあったが、この点はミュラー自身が平に誤り一件落着して無事に解決して、久しぶりに祖国ドイツに帰国できた。それに際して、学生時代を過ごしたハレ大学を訪れ、お世話になった神学者のトールク教授と再会を果たす。また彼が一時的に間借りしたハレのフランケの孤児院でも再び宿泊したが、このことも孤児院事業着想といよいよ直結してくるのである (Pierson 1899 : 119 = 1964 : 107)。

また久しぶりに実家へ帰省し、父と兄と再会を果たした。そこで、かつての「悪人」「俗人」が全く回心して「新しくされた別人」になったミュラーの豹変ぶりに家族も驚くことになったようであるが、この時にミュラーを通して父もキリストに回心したようである (Pierson 1899 : 119 = 1964 : 108)。

ミュラーにとって亡き母も含めて、既に述べたように家族は親しい関係ではなかったようで、彼の日誌や自叙伝等においても事実関係以外はほとんど述べられていない。帰国後の 1835 年 6 月 22 日、妻の父の死去とほぼ同じくして生まれたばかりの息子エリヤが 6 月 26 日に死去するという悲劇が起こった。結果的にミュラー家にとっては、リディアだけが一人娘として残された。ミュラーは日誌のなかでは、家族の死別について言及しつつも、感傷的にならず淡々とその事実を述べるにとどめている (Müller 1860 : 89)。

ただし翌月、心労も重なって、ミュラーは胸(肺、気管支)を悪くして、職務を続けることができなくなった。この詳しい病名と病状は詳細はわからないが、いずれにせよ静養のために数カ月を、ワイト島 (the Isle of Wight) で、しばらく過ごすこととなった。静養期間で、ジョン・ニュートン (John Newton 1725-1807) の伝記を読んだことが記されている (Pierson 1899 : 120 = 1964 : 109)。そして同年の 10 月に復帰してくることになるが、その迷走、回心、訓練の果てに、ついに孤児院創設に着手するのである。

結 び

以上、本論では、ジョージ・ミュラーの誕生から孤児院創設に至るまでの青年時代

(1805-1835)に対象限定して、迷走、回心、訓練の軌跡について、日誌、書簡、自叙伝、機関誌をもとに分析した。その際、できる限りミュラーの内的世界に迫るために、彼の自叙伝による時代区分（時間軸）を基に分析することを試みた。すなわち、これまでの研究では断片的でわかりづらかった孤児院創設に至る着想、経緯、そしてその動機にかかわるエピソードを時系列的にミュラー目線に再配列して再検討することを試みた。それを通してミュラーの思想形成過程とその内的世界観との点と点が繋がり、彼の孤児院事業と福祉思想の全体像がより鮮明になってきたと言える。

注

- (1) 本稿では、Müller, George (1837) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume I, London: Dryden Press の引用に際しては、2006年の復刻版 (Hamburg: Tredition) を使用している。この版は1895年第9版を基に復刻されたものである。このなかに、日誌、一部の書簡がそのまま翻刻されたうえで掲載されている。
- (2) 本稿では、Müller, George (Wayland, Heman Lincoln edited & condensed) (1860) *Autobiography of George Müller —The life of Trust: Being the Narrative of the Lord's Dealings*. Boston: Gould and Lincoln の引用に際しては、2019年の復刻版 (Compass Circle) から使用している。この文献は、Heman Lincoln Wayland が1860年に編纂しているが、ミュラーの記述において文脈上、意味内容が解読できにくい（不明のところ）等を編集者挿入という形で解説している。特に初期の頃の記録では英語がネイティブでないミュラーの英文を文法的・語彙的に校正した可能性もある。
- (3) 本稿では、Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol: His Life of Prayer and Faith*. London: Pickering and Inglis の引用に際しては、1999年の復刻版 (Kregel Publications) を使用している。
- (4) 本稿では、金井の著作は、戦後に新約社から再版されたものを遺族の許諾を得て現代語版に編纂した金井為一郎 (1990) 『信仰の勝利者ジョージ・ミュラー』いのちのことば社、を使用している。
- (5) 実際には、ベータはその信仰はすでに墮落 (backslider) していたと述べている。別の述懐では、ベータは、ミュラーをゲイの仲間に導こうとしていた (he thought it would bring him into gay society) (Müller 1860: 25) とも記載されているが、このあたりの事実関係や詳細はわからない。
- (6) 当団体の公式ホームページ (<https://www.mullers.org/ski>) によると、現在も発足当初の理念を継承しつつ、1300人の支援者により毎月平均95000£ (日本円1500万円) で、イギリス国内外の宣教師の支援、160の諸団体の支援を続けているとされている。
- (7) 一般には、1601年設定とされるが、これ以前にもこれに類する諸法律の体系があり、あくまで1601年はその体系のまとまりがあったという意味の便宜上の年代である。実質上は、1572年法、あるいは1576年法が制定年である (小山 1978: 16)。

参考文献

- 木原活信 (1993) 「同志社のアイロニー —山室軍平の中途退学—」『新島研究』第82号。
- 木原活信 (1999) 「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋出版。
- 木原活信 (2018) 「ジョージ・ミュラーの思想形成におけるフランケの敬虔主義の影響について」『評論・社会科学』(127) 1-17。
- 木原活信 (2019) 「英国初期ブラザレン運動とジョージ・ミュラー —その分裂と挫折が福祉実践思想形成に及ぼした影響をめぐって—」『キリスト教社会問題研究』68号 1-33。
- 木原活信 (2020) 「ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響」『キリスト教社会問題研究』69号 1-30。
- 小山路男 (1978) 『西洋社会事業史研究』光生館。

- Grass, Tim (2006) *Gathering to His Name : the Story of Open Brethren in Britain and Ireland*, London : Pater-noster Press.
- Müller, George (1837) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Vol-ume I, London : Dryden Press. = (reprint 復刻) 2006 Hamburg : Tredition (=1895年 第9版を基に復刻).
- Müller, George (1841) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Vol-ume II, London : Dryden Press.
- Müller, George (1845) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Vol-ume III, London : Dryden Press.
- Müller, George (1856) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Vol-ume IV, London : Dryden Press.
- Müller, George (Wayland, Heman Lincoln edited & condensed) (1860) *Autobiography of George Müller —The life of Trust : Being the Narrative of the Lord's Dealings*. Boston : Gould and Lincoln = 2019 復刻版 Compass Circle.
- Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol : His Life of Prayer and Faith*. London : Pickering and Inglis (=復刻版 1999, U.S.A : Kregel Publications).
=アーサー T. ピアソン著 海老沢良雄訳 (1964) 『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラー そ
の生涯と事業』いのちのことば社.
- George Müller org 公式サイト <https://www.georgeMüller.org/> (2021年3月1日閲覧).
- George Müller 資料館公式サイト <https://www.Müllers.org/> (2021年3月1日閲覧).
- “Find A Grave” (埋葬記録データサイト).
<https://www.findagrave.com/memorial/38554103/george-ferdinand-m%C3%BCller> (2021年3月1日閲覧).
- Alma Church 公式サイト
<http://oldsite.almachurch.co.uk/alma%20church%20history.html> (2021年2月28日閲覧).

*なお、本研究は JSPS 科研費 JP19H01601 の助成を受けています。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19H01601.

George Müller's Early Years (1805-1835) :
On the Straying and Conversion during his Adolescence Leading
to the Establishment of the Orphanage

Katsunobu Kihara

George Müller, the founder of the Bristol Orphanage, does not figure in the academic literature, although there are many biographies of him as a “great man of faith.” I go beyond the conventional framework and proceed with the discussion of a research topic in the history of welfare thought as “George Müller research.” Müller’s relationship with Juji Ishii and Gunpei Yamamuro, his connection with German pietism and the early Brethren movement in Britain, and the impact of his life on Japan are already known to readers. Based on these points, this paper traces the trajectory from the birth of Müller to the establishment of the orphanage (1805-1835), using his diary, his letters, his autobiography, and a journal of the Bristol Orphanage as the primary material. It does not deal with the historical facts of the orphanage years after 1835 ; instead, it focuses on the straying, conflicts, and the conversion of his adolescence leading up to the establishment of the orphanage. The periodization will be described, as far as possible, along the time axis of his inner world, based on his autobiography.

Key words : George Müller, Müller’s autobiography, the Bristol Orphanage, The Scriptural Knowledge Institution for Home and Abroad (SKI)

